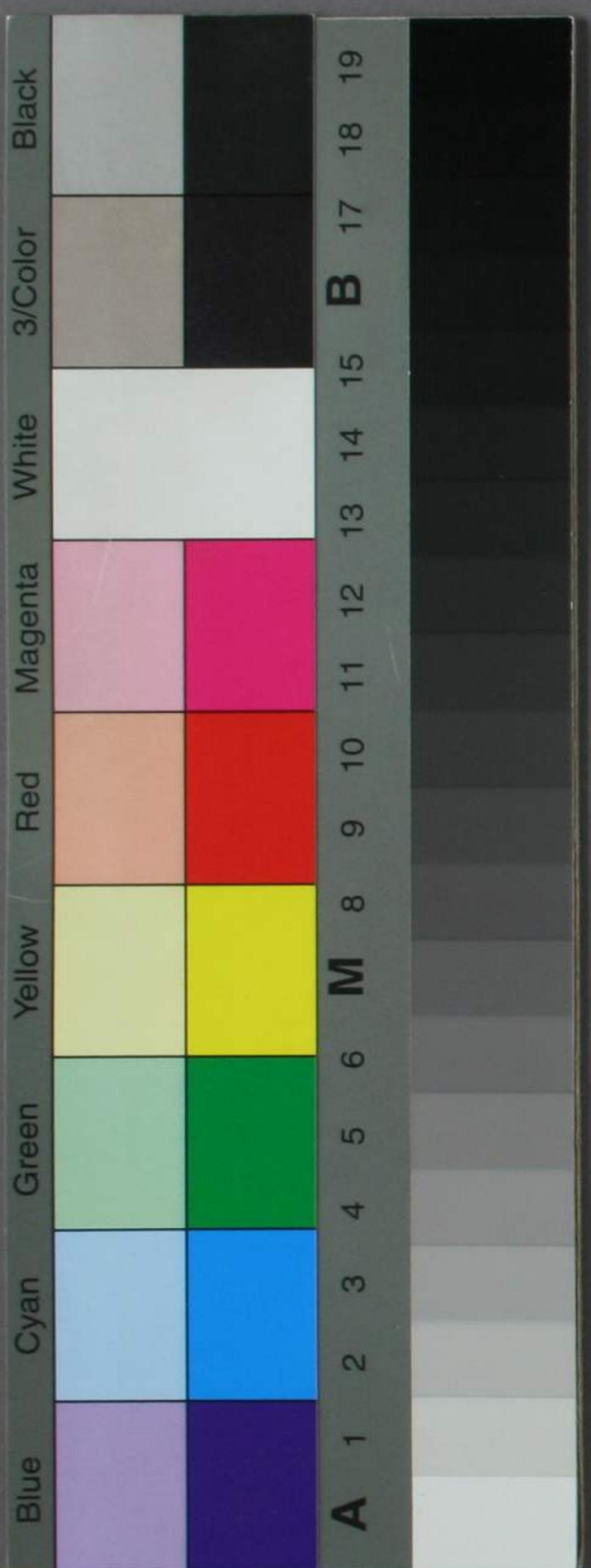


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN



13
34
25

物語院

あ編六、中ノ内

枝

南總里見八犬傳第五輯卷之六

東都 曲亭主人編次

第四十九回

陰鬼 陽人 肇て判然
節義 貞操 迹か苦諫を

カ二郎尺八ホをひひりなく父楷平が甲夜の間よ多く門が立しを音音が拒むと
容ぞきと笑ひ俱ようち驚きく頻々嘆息あくび一々音音も今ま後悔の
額を撫で嗟嘆し現彼人の心操義小仗と恥をあらわすもあらば故主の為よ心を
盡せし此度の功を子共へ譲りて船を沈めて左田河の底の水肩がありありんや。
然ともあらぬがぞ魂の門ふ立國ふ立キを情由どふゆうであらの隨ふ罵辱あら
くさればむどに心と葛の葉のうづふすりて脣迷ふ旅宿あらの草の原帰る
ゆもあらざふ冥土の障とあらやせん痛ぢやひと密音ふうえくらう歎け。

法師シテ。證談シテ。故郷シテ。像見シテ。贈シテ。すすりの物の本シテ。もとえシテ。されば世よかにゆきを
誣シテ。か。然シテ。を力二尺八寸シテ。あの戸棚シテ。ふ開シテ。かえシテ。と禁シテ。ひまわシテ。ひど隠シテ。
の。まほシテ。死シテ。ひきうシテ。お見シテ。が。お見シテ。が。お見シテ。ども。か。うりの。す。何シテ。あ。ん。吾シテ。僧シテ。が。許シテ。
娘シテ。は達シテ。よ。共シテ。侶シテ。ふ。開シテ。て。えん。誘シテ。と。躊躇シテ。く。身シテ。を。起シテ。せ。だ。曳シテ。よ。單節シテ。も。後方シテ。ふ。附シテ。く。
と。家シテ。と。くも。戸棚シテ。の。下シテ。立シテ。よ。親シテ。克シテ。ん。す。も。お。死シテ。力二郎シテ。と。尺八シテ。吐嗟シテ。と。お。うり。うち。騒シテ。
胸シテ。貫シテ。く。五更シテ。の。鐘シテ。と。共シテ。ハ。声シテ。の。鶴シテ。の。音シテ。も。鄰シテ。の。時速シテ。けれど。吹シテ。む。風シテ
を。ぞ。これ。殊シテ。更。近シテ。く。や。あ。曉シテ。く。不。あり。や。う。時シテ。て。來シテ。れ。と。周章シテ。の。冗シテ。
弟シテ。み。目シテ。指シテ。心シテ。の。中シテ。別シテ。を。告シテ。て。竊シテ。お。急シテ。ぐ。起行シテ。の。准備シテ。ふ。笠シテ。を。引シテ。轍シテ。
手シテ。脚シテ。絆シテ。を。矧シテ。み。不。結シテ。更シテ。嘆息シテ。を。と。も。み。か。知シテ。ひ。が。先シテ。み。立シテ。一。音音シテ。へ。棚シテ。
袋戸シテ。を。開シテ。ても。暗シテ。死。被。此シテ。を。拂シテ。れ。ば。果シテ。し。と。是シテ。當シテ。二。包シテ。を。とり。取シテ。單節シテ。よ。是シテ。
欽シテ。と。さ。一。示。手シテ。を。引。轍シテ。く。左。見。右。見。く。ま。ん。が。受。と。り。ゆ。一。時。も。鳥。夜。死。氣。

大傳玉車卷六

卷之三



大傳于軒卷六

山東堂

不獨奇音
等怪讀者

且双方を推鎮り。その名を向んと老後の腕立走蒐りてこの杖を二人が間へかゝ立と推分んとせると身の肩より掛ける両箇の色を多くも撲地と落して慌忙に彼此と搔掻當て取る程ふ彼癖者う抜内處刀尖狂々く石塔を所削りくる石火の光より事件の武士も両箇の色を引提て直躬と立すと見えくる形ハ消く往方を知れば是れ元火道の
御事。かう奇術を獲うて入へ道節ぬよあびて誰う亦よくある至らんもの多と
手を向れども必被明かりべ。とひ決ち暮一ふ要時もあぐだ入舊の野路をこ
やくへ走るやん癖者も亦茂林より即く頗りふれを追ふれども及ぎりえんあまぞ。
續たるもあだりふけをかくへえれへともあく。きの門邊ふ立ちとれ单節が竊ふ
あれ。あがこや。いこひ。やどせきゆく。あらげざぢ。と。と。かひぬれき
憐え紫小屋へとぞ憩せろ。かまへ程ふ莊役が白井の下知を以てうる縛の趣碑安
えく心ふかれべ尻もあらわを竊ふ其處を立ゆく或へ背門より庭面より聞ゆく母屋
あらきつてふ渠あり先ふうちつて。あくふあらる両人ありその一人は道節ぬ彼癖者と

。ひぬつうとひぬまうすのあかぐぎ。ちぐ やうかくあくわ
あらわるもきみ。ひぬつうとみよ とだう おち まちき。
仇敵の路次の窮陥ふ。犬塚が誑諭する密書のまど届けを送り、竊写をうち
まうもと。びんぎりかく。けんきんい。め
驚起に詫びかる便宜へ多く獲ること。見参入をあとや相うちも、舊婦
ちう罵られ不似のころをえとば恥くべく黙止う。若是て又道節ぬ。犬塚を
さよ。ひぬつうもとまよ。ひぬつうもとそ
索へて犬川共宿遠づけの外面よ出ゆひう。この間やうを子共の入を音音そよふ
す。。わくび ええ。あらき
報んと幾遍とく縁頬へ足踏みす。面をせよ。まぬかを多そ程不兩個の媳
めあわ。きりだまち。あく 婦ふ相偶れてあらは力二と又八九と浅すくうれりをあらともく退室し櫛下に籠
まながた。うちあまくねぎあらう。ひだ
柴垣の蔭ふ立て通宵念佛の外他うかり死無事かとむか香を焼を事あると
がく。ひぬつう
佛足を戴くとの世の常言ふ似うもうがで罪あ死今まう多バ彼茂林え。之がその
包を遣せと免道節ぬ拾ひけんす。あらじとこれハ亦道節ぬの三包を撥拂取
りくとが保ふ肩よけつ。あま甲夜の单節す遞与せても儂もうべハこれ彼の
か。然ううう入子共のうへも立地ふあす。あらんとくとぞぐる言葉の
もとまいま。おもひ あらまき。うまきもとあら
本末今さくふ音音ハ甲夜の竊聞。彼莊助と道節が問答す。めひ合ふ。あ
うう。おもひ あらまき。うまきもとあら
僅ふこの條ある疑ひハ稍解も。解ぬ包の氣ふかる。先も单節の燈火のむと入る
きあらむ。あらまき。ひさ まちう
兩袖の結塊ふあよせかれ。音音も間近く膝を進むて據くをえれば是も亦兩個の
ひとく。あらまき。ひさ まちう
人の首をれひうや。あらまき。ひさ まちう
力二郎と尺八首級を色を変れあらぐと今ま在一面影ふ。紛々くもあらぐれ。
あらまき。ひさ まちう
又胸深れ心焦れて嘔淺す。所夫よ伏よ子共ゆそと共声小歎だ。弥倍を愛惜の首
きううひき。ひさ まちう
級を取て膝み乗。秦れ髮を搔揚てあら位つて多ども。あひ難う味凝の文小怪

置處や違べ。あれふありて猜ひふとの二級の首アと道節ぬ。擊捕も。一兩
歎小疑ひす。以あれを三包の真の秋か。アと单衣の袖をもせす。あれとの証と
考不足れ。地を打撻ハ外もど。この言のみ必當りんが。す。而疑ハ。三包を解体
か。然ううう入子共のうへも立地ふあす。あらんとくとぞぐる言葉の
もとまいま。おもひ あらまき。うまきもとあら
本末今さくふ音音ハ甲夜の竊聞。彼莊助と道節が問答す。めひ合ふ。あ
うう。おもひ あらまき。うまきもとあら
僅ふこの條ある疑ひハ稍解も。解ぬ包の氣ふかる。先も单節の燈火のむと入る
きあらむ。あらまき。ひさ まちう
兩袖の結塊ふあよせかれ。音音も間近く膝を進むて據くをえれば是も亦兩個の
ひとく。あらまき。ひさ まちう
人の首をれひうや。あらまき。ひさ まちう
力二郎と尺八首級を色を変れあらぐと今ま在一面影ふ。紛々くもあらぐれ。
あらまき。ひさ まちう
又胸深れ心焦れて嘔淺す。所夫よ伏よ子共ゆそと共声小歎だ。弥倍を愛惜の首
きううひき。ひさ まちう
級を取て膝み乗。秦れ髮を搔揚てあら位つて多ども。あひ難う味凝の文小怪

死喪のか形と涙の雨下の袖と絞すもあらず位論む憂愁漏れぬ稽平も慰め
子の頭を低く斑ある歯を昨締るあれうるる勇を攻念仏胸か急鉢うくとも善惡の
多寡人間小道れぬ現會者定離かうもあれと觀念の眼を閉てもも落る。
涙ふ哽く法然う當下音音へすくふ志氣を喪へて原来子共も擊れ
けき心やうゆかえが。その戦歿の為体を安らかにさよとひひれが愚良單節
稽平が左右小膝を衝詰て世小死人歟と疑ひて大人へ還そ恙かく。恙も
あくかず。と身ひて良人の死顔をゆさびる。武藏の家暴闊て悔じ
浦島の死玉匣やうやく。かうかり果一趣をあくせて。がゆりふぞ。や嘯大人と
呼みて。更向ふ声の枯れぬべ死歎を徳の繫芒外昇降らぬ驟雨も撲々
如く俯沈む媳婦と媳婦とおひそしく立立られ。稽平の涙の目皮ちがく死涙
うあまく幾遍抜いりんとまれば生憎ふ塞る脣を呑みと博つ息を吻とうとく。

これらの方へ問れども詳か告んと身を恥ひやうへられやへ訪ん音音より強
ふゆども。かどり。と娘は達波を禁めて失孫。大約人の辛不幸倚伏ハ糸ハ纏ふ似う。和が犯せ
罪科を宥られてもえれうか快らぬ老後の寸功兩個の手共に譲らんと身ひ決を
とどく。春空。と田河に投げれど死もぬ果て年采穀する水枝の邪魔よからずややをも浅瀬の
ゑ入流れて東の岸に著いた。と浅まく行をぬ。がまをと今まく棄し命を
懃る助る神の恨く濡る。休む忙然と且く水際よ立在つ。と身ひ業報のあざ
滅び。とあり。かづくもあくぬ身の水よ入りば死れぬものと。と彼大塚の
城兵ふと刺さぐ。其處よ骸を曝んと身も苦。恩愛の絆よ牽き。凡夫心子
共の先途を。まほく。と舊の岸邊へ赴け。が戰ひ果て人影うく敵。死躬方欲彼
こち。やまと。あが。此小俯横きる死骸。あ。喜ぶ。子共を擊れども。とがつら。暗に夜よとの生死の
運ふが。わ。と暗れば身甲の威の色も見えよ。がく。軀のこかく
迹を索え。送もなく檢せ。ふと暗れば身甲の威の色も見えよ。がく。軀のこかく

定う終だ。この故ゆき捨果し命を要時存在くつて子共の存亡を定めり。
後かともかくもかくもとひへがその曉よ神宮より宿所よ走り及びて心竊小準備と
姿を変て次の日よ大塚へ赴たゞ街談讐説を傍向ひから河原の戦ひに陣番丁田
町進ハ力二郎よ撃れうざざれその隊の兵を東の岸よ踏苗りく尺へと戦ふ折力二郎が援
來く胞兄弟力を勧へる奮戦突戦瞬間よ雜兵夥刺伏せ頻よ克よ乗らむのう。
町進が属役小仁田山晋五と呼きとの四五十名の隊兵を麾下大塚すゝ援兵も連放する
鳥銃小力二郎も尺八も炎所の砲倉竟よぬ堪せ間近に敵と引組く刺ちて伏方
カニ郎が首級をりて大塚信乃と偽り唱へ尺八が首級をりて小廝額藏と偽り唱へく。
けふかくも属役仁田山晋五ハ力二尺八が首捕て大塚へ敗陣し、肩を功よ誇らんと。
足立守義きう。おつまめの身と事あきう。こりぐざう。おとと。
力二郎が首級をりて大塚信乃と偽り唱へ尺八が首級をりて小廝額藏と偽り唱へく。
けふかくも庚申塚の邊あつ棟樹の下よ泉らきと縛人口よ隠れをければこそや子共を
先として死後れる老が身の身方も毫毛鬱憤よ腸を断歎せよ獨つりくもやう。

泉首せうと子共が夕の悔むもの甲斐あるやうなど侵入すが偽名サ一犬塚犬川
西豪傑の恥を雪らく云云ども方があらひとの人々やも報ぐどもぞ只管ふがくが要時
あづ世ふとの日を消すも一日千秋されが更闌入定りて庚申塚小走りて心當を棟樹の
下潜び近づれ年しく取勢せよ子共の首を豫て準備の行祇小椎包を引提て走ると
あざりくなくやだ近邊か夜を衛る兩個の獄卒棒挾を追蒐来て癖者等と呼制う
縛既不急れれば西箇の色を秋草の色よ隠して些も機譏せば返てあを引つけて晃
毛と抜る朴刀へ老の巻ふがやえの業物先よ進みて獄卒をばくをすんと砍伏せく。
やも刀か又一卒の棒りう共よは首を轟ひ落つて入りて内へる二の大刀小左の肩す
乳の下を乾竹創ふ血け立てる刃の刃よ叫びもあらず身を轉て仆まうこれ
聊慰ゆくもあく鮮血を拭ひ納り朴刀もく叢をきくを取ゆス携ふ
ととく。うちもようよ。よひづれ
戸河を歩涉て三四日と夜を日よ續くこの地よあつたハ一切よが身の為かば件り

と。身の趣を由縁のものふ送まばハカニ郎凡ハホガ忠死義歿を誰々傳へん。音音八年
來中絶し再會快く然ども渠をばくとめ人を法を踰る。それ人情美をうそ
進むハ公道か。故主のゐやも子共のゐやも西かく已べく。とぞぞうよ阿容を。
この隠宅より索あつ既往をもざ云云と報詔ばく罵られ拒れてもかの懲をゆふ。
あよ一宵をぬ。柴の小屋より想え外かく故主のえと子共が七魂竊笑ひ又覗窺。
あきらめくときを。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。おもく。
良觀父腸も袖も渺離も感涙を絞る。不思議の一條カニ郎凡ハ死へて
五日より死れども靈はこの土を去らぬ。在一面影す。一げふ且くある頭れど
母と妻とを慰や。嗚呼孝かる。義ある。もろ折まれへ外よ立く彼晤譚を
笑ひ。障子の透すほくと見ゆ。勝ねが呼び。くが。圓坐よ入ら。かと。要鞠
くを。頸を携。来る。されば消り失へ。と躊躇ひ。生を隔の紙一重。佛を
憑む唱名も音ゆ。卒終夜涙。暇あた魂を誰促は。さうども。八声の鶴の
鳴ば。驚され。冥土。陰火の光り鮮々。窓ゆ。ぞれひ。振向くる。の
御。今度。身達。ハ。胸の苦。口説立く。告られば
音音も媳婦同胞も。哽かへ。咳へ。泣。哀悼悲愁の。中に。
音音ハ僅よ。ひえ。頭を擡て。嘯曳。単節も。歎た。妻子の涙。龐
人の。あ。か。と。背。う。の。命を豫く。か。め。と。あ。か。べ。と。捷れ。忠も。義も。あ。ド。
武弁の家。仕へ。命を守り。義よ。仗。も。愛。を。友。を。薦。ん。ふ。の。日。敵。も。外
主の先途。お。ね。も。教。を。守。り。義。よ。仗。も。愛。を。友。を。薦。ん。ふ。の。日。敵。も。外
御。亦是讐の麾下の武士大石兵衛が陣番を繫捕すのを。犬塚犬介兩雄のみ
身が。死。せ。れ。ハ。死。して。榮ある。子共が。武功。この。人。や。ゆ。や。紀。父。も。父。な。う。子。も。子。な。う。
拟も。面。あ。一。稽。平。と。恩。よ。負。歎。誠心の。子共。功。を。讓。う。と。捨。一。命。の。盡。せ。ゆ。
神の祐。歎。佛。力。歎。ま。だ。ハ。カ。ニ。尺。八。が。孝。心。其。外。よ。船。と。あり。後。と。か。く。早。河。の。親。

必死より代りけんともあらずと諫め。吾脩が愚痴と僻見す。世ふ衆子共を怪む。
存在もの父をの鬼やあらん。變化欲と疑ひす。の愚きよ許へ。と白地よ勸解く
泣。夫侶よ與。軍節も泣。腫毛二重瞼。よ八重雲のかう憂ひへ世間よ儔早再會
ばり。うえ。ちか。うも。ひくくひとよ。あらう。ゆ。うれ。よのあう。う。う。まのま
涙。夫侶よ與。軍節も泣。腫毛二重瞼。よ八重雲のかう憂ひへ世間よ儔早再會
別離。稚枝の花の年を歴く。共白髪ある雪の松。送の心うむ解く。本意ある對画松
候。側。う。と歡。う。多。も。只哀。へ。た。俺们。が短。妃妹。俠の縁。へ。別れて後へき。よ
ま。雁の翼。も絶果。く。音耗。變。ま。ぬ。あ。月。の。け。よ。七日。の。曉。も。名。の。三。かり。け。を。つ。わ。れ。ば。
年。よ。下。ぐ。牛。織。二。星。の。あ。瀬。は。あ。下。亡。者。の。影。も。苗。や。逆。水。の。や。く。ぬ。旅。の。衣。み。を。
縛。合。て。冥。土。ま。で。伴。ひ。ハ。せ。ぞ。づ。れ。ゆ。あ。く。長。屹。嘆。き。を。送。え。れ。こ。の。身。あ。の。身。へ。今。さ。ふ。
縛。合。て。冥。土。ま。で。伴。ひ。ハ。せ。ぞ。づ。れ。ゆ。あ。く。長。屹。嘆。き。を。送。え。れ。こ。の。身。あ。の。身。へ。今。さ。ふ。
措。處。か。た。憂。よ。た。を。腕。く。も。萎。む。朝。良。の。果。敢。あ。た。露。の。玉。の。緒。の。う。え。あ。ば。絶。よ。旨。も
月。も。照。ら。き。ぬ。の。を。の。ま。で。放。何。樂。く。く。存。命。人。骸。へ。土。よ。む。と。も。心。変。ら。ぬ。あ。く。ふ。
後。の。世。ア。を。憑。一。か。走。れ。死。や。死。ん。と。稽。平。が。左。右。す。腕。を。伸。く。朴。刀。を。取。え。よ。な。ぞ。

け。されば音音へゆきふらうの闇も天の色も明くやつる反故張の窓の下をえ
り。かうらむどもあらう。あれ。かう。あれ
やと。娘媳ゆ達心を鎮めと具もと被せんや。カ二郎尺八が姿へ消ゆ亡ふれどその行
てそ。やう。ひと。ま。あひて。ふーぎ
舉ひ西箇。かう舊の役を彼处より要あひび。れもありまゆく不思議のみ
矣。そし被せんや。といひそく女同胞へ目を拭ひ。まよあうまく像見を今
れ見るをかく忘る際もあぐる。つゞ歎きと真十鏡影も像もかく人の送ぜられた
現何やあんひどそ駄々共侶み立すか窓の片明り娘も妹もまじせやけと複縫
つは。ちう。さき。ひと。のと
然どうち泣くる妻の声を口隠らしてかどーとお夢よだ。もうす絶く神をぬ地蔵の
茂林の曠野をく彼二つの病臥せしを妹と俱よ勦りく馬ふ衆せしとせ。時よ頃りよ
うまつまゆ。かくせう。よ
馬の屬強てをあつて畜生の世よあ久をも知りく駭怕れて衆せドとく。
狂ひあけりとゆく。今暁を甲斐あれと唧バ單節もうち泣く然る所以ゆそ
狂ひあけりとゆく。今暁を甲斐あれと唧バ單節もうち泣く然る所以ゆそ

この両包を馬より負ひて歩く。重いと覺る。
が阿姫も亦齒せ大人も見えぬ。嗚阿姐。やうり。無事。と同胞が披く色に一隻の黒
草威の身甲の鮮血よ塗れ。韓紅な痛みを送。鳥銃の裏缺。痕。六七。
花菱よ小鎌の腕鎧。脚盾。添ふ。これを。彼を想像する良人。やうが陣
歿の烈。うけ。戰ひのがあけん。と哀傷。涙を。果。かた音。集。小塞。
寶の宿。帶を引締く。ひやや。媳達。幾生涯。歎くとも憂へを遣る願。比
あべた。次。かす。奇。縛の顛末。これを夢とも現とも。あひゆれて。親女房の隠を
解く。この両包を送る子共を寔よ神。やけ。それが。その妻子と。志の似
ぎ。あぐ。と。思つた。ゆか。娘を禁め。や。と。辯。雄。く。諫。や。心の底。弱り
果て。鼻のまゝ。まれ。歎。か。親。や。稽。平。へ。肩。羞。て。胸。苦。げ。よ。嗟
えん。かよ。ぬえん。こ。も。えん。こ。て。も。えん。この身甲も腕鎧。脚盾も。えん。素。う。認。り。えん。

こひ力二郎尺八ホグ池底を落す事あると死すが家を脱藏やと戸田河原の戰ひ。そり身へ膚よ著て終は陣歿あらずと然るを彼ホハ世不か死後ふこれを妻子ふ送せ。今そり良人ふ立代りく志恭やと不命を保てとのん料がぞゆん。されば浮世ふ存在く良人の首を葬る日ふもがそ骸をも瘞そえ。是處にかと朴刀を晃りと抜く取直りく腹を切えども程ふ吐嗟とえぐる音音より鬼也單節（シテ）もあく身を投げり。やよ嘯と叫びつ泣の右ひづ。携る巻ふもあく舌端を波よ声をき。立てて物體を俺们を今更に諭へる道理よ惺懃（キシギニ）小相応。又ぬ刃物三昧自殺の覚期（ハリスホゾ）。身ひどきありと雖ひどく骨妹（カツメイ）。力を鬻（アマ）。辛くて取鎮（サムライ）。方尖を筵疊（シヤンダク）。縫苗（ヨウモウ）をく喘々諫れバ稽平頬（カツハラカク）をうち掉くひかく放さね怪我を裏（ササギ）。何とも笑ふいぬ。二日は戸田河やく。死來をもせ。けりまも存在する子共の為より年來故主へ下り。もが愁を鬱

解（ハシ）。はす恩義の為ゆく疎遠（ハリスホゾ）。不実すあらば。かま一程小主家の滅せ。子共は訪とく大義よカリ。この時ゆくと身を殺して彼舊恩不答へと云ひめを。今まく餘命を以て食ふ。年老力衰へく故主の先途をうすくもかた殉死を。義士の素懷を哀す追りく死を樂む女子共と一列よふ。まことに。おもろに退ばず。と取國（ハシ）。疾視嘆るを推居。も夢み单節（シヤンダク）。へんちで。やまかと。音音ハ詠ふを衝と寄せく。噫情剛（エイジヤウガタ）。稽平ぬ。殉死ハその身の本意か。と。帰参。免許を受ぎて。よこの宿所で自殺せ。法度を犯して故主を侮る罪を亦復あ。よ累人加梅莊役が徇傳（ヒンデン）。讐敵の下知狀。いれ。ひもあらひを天明て。おもが還り。多ひ。和子のうへと心ゆか。舊恩實を忘れ。擊射。兩個の子共。ばりく。故主の歛。立影。塗ひ死。死き折よ潔く死んと。おひきを。不覺。おうむと。寒れば稽平。莞ふ。ともか笑く。寔ふこれへられ。あれと。おもか。私。再會を。おもひ。あらぬを。

死裏瓜田の履嫌疑を後ふ送矣。和子又見參禪りありまくが大塚か往
へ。方を索く云云と子共のうも宿志を報くとも又ぐむかり免鳴呼あすと領旨
をかかく不死を止めば思ふ單節へ携りくる巻を放ちく共侶は辯を添て殿を猪平
ゆく諾ひく刃を輕く納め告別へと外面へ出んとくも縁類の障子を破と陽切を
並立るニ箇の辯者真額鉢參索辯各身軽の打扮へ是則別人か。昨々來う一
莊役根五平丁六願少と左右不持く意氣揚々声高やく小袖の胸へ突きあ
べと昨夜う猜されどもやう氣を宿所へ還る面色しく裏を垣根の間荒がる。
背門より潛近つて簾子の下よ終夜一五二十をみをゆう音音へまく猪平も亦
是煉馬の残黨か道節が餘類かく僕縛ゆく白井へ牽ん腕を回せと呼そ腰よ著
うち黒縄をまき取りく投げ如く仇糾繫极く張肘ハ車よ逆す端端の斧突立
かる丁六願介の行脚を以て私声令で根秋も投ふと縁類を突きゆく聞けり。

第五十四

白頭の情人合巻を遂ぐ
青年の婿婦菩提ふ入ゆ

音音ハ多ひうけもかく敵の間者よ裏を被もく陳ちくもあふれべ零の單節を
後方よ添へて寄らば所と懷劍の鞘を握りく立んと手を猪平をあくえく。
推闘つて世も騒ぐ。サあくすもひき。きあみねごへら。も。ち。あきら。ある。
あひの。ひとひう。ひとえあ。と。ひ。むや。ちぢ。あ。所作をかふ今まく益の殺生も放ほやす。而に讐敵の半隻。望の隨よ死天三途の
瀕踏をまさんと右ひふ携りく朴刀を左ひよ取て挾むる必死の勢ひ心びくへ悍く
も老人あれどもひ悔る根五平擬議も氣色もく彼難付せと敦園ハ六願介へ
左右より食する斧を振揚く擊ひ抜んと走り蒐弓を猪平閃を遣違て拔合し
う刃の電光左よ流。右よ狂く两三刀打すとえをる先よ進モ。十六を腰斜よ破と



研る砍りまく苦と叫びて更に斧うち捨て外面へ逃んとて縁嬢す。落る軀は急地す。
兩箇よまれて倒れけと顕介へこれを見えりて駭迷ゆ。庵福のうえ走り避んとほ程ふ。
音音が透す。逆撃の刃よ額を劈れ。叫苦とぞりふ外面へ又引えを肩尖す。背を
廻るびと砍られ。痛もお堪せ。幾歩投げ。如く跌た走りく廻す倒りて死す。
根五平この光景小舌を巻だ。膽を飛しと立足ゆく縁嬢を踏外へ滾落とく抜
甘腰を敵たつ伸の慌忙犯逃走を。根五平音音ハ信と見え。血刀引提く。夫侶不追
轡免んとほ程ふ根五平へと庭門をぬく頻りと走る。車ひ單節も氣をぬいて
俱よ焦燥ほどもあだ。奥のこゑ人ありて曳と被くら声と齊一出居の闇亮の間す。
打坐を銃鏡の竊違を。根五平へ背を胸を擊れる。苦痛の一聲空を廻く仰
きよ。身をもとめ。助天刀よ根五平音音ハ驚か。立駐すと見え。之
反仆れ。息絶けを。ひびかれ。大刀よ根五平音音ハ驚か。立駐すと見え。之
曳す。単節ハ立すと諸手をかく。破闇亮を裏面す。幡と推闇く頭れゆる大山

道節と懲りと願ひと諭を。陽亮を奪ひ。ふる舊の如くふ間さ。もと上坐不著
し。ふれぐとむろふ音音ハ。あづとの血刀拭ひ。納めく遠く主の臣とへ薦ふ
を。根五平もあづの良よ刃を納めく。假よ且外面よ走りゆく根五平が死骸よ立
す。銃鏡を抜取り。頭を回して四下を。されま。うち。うち。きあす。あく。おな
る。と。多バ恥く件の死骸を引揚起して。推落し。又立す。子六顛介が七骸を抜
り。と。か。が。井の底へ落す。この時既不天へ明く。秋の初風涼す。朝餌を
求食る群衆の離色よ降集る。のとびかひ。箇の七骸を里入ふ。よせ下そく。
おとえゆく。隠せ。音音。これ。を。す。も。く。だ。團扇を。把く。道節。ぞうの扇ぎ。含笑す。
えべ。を。昨夕。か。ま。あ。と。き。み。と。あ。と。い。隨よ。曉くも還。せ。あ。と。い。ば。つ。ふ。と。あ。と。不。禁。く。安。く。が。う。一。胸も。稍
ま。今ひも。う。ふ。も。あ。う。そ。も。昨。夕。か。あ。く。の。怪。一。は。う。の。怪。ひ。解。れ。も。ひ。
と。あ。う。き。根。五。平。木。小。辯。の。機。密。を。知。も。と。二。人。す。と。繫。漏。ふ。枉。津。日。の。神。ひ。

景。此打々下還らせかひ。見る裏の微妙よと他事やくべ。夷の單節も
後方す存一額つ延々悉かだを。祝ける道節はてさればよまれへ昨宵更闌。
如比々々の處處て大塚ふよ索遭ゆた。うて犬川共佑よ彼ニ大士を相侶く曉うふぞ
悉。背門すとへとせ折よ夷の單節が哭声の堪ぬ。うと小室えり。異あべーと
名ふるん呼門も甚ぞ彼人々とて。久良奥す立聚居つ。松平が事の趣力二郎尺八ホ戦
殿の子首級の錯悞。彼胞兄弟が七魂ハ要時姿を顕へ。親と妻とを慰むる。縛
もすと竊聞く。これまし。大塚大川大領大田の四大士も感涙坐す禁む。そ
憐む。トカ二郎尺八ホ忠義の為よ命を隕せーの形だ。年来離別の父母を相合
せんと念へる。孝感空へて。その二親の再會ハ子共の靈の致せーも。それ大塚
ホよゆる。皆是過世轉輪の業報とて覺る。をきつむと原ふられ。そ
大吉の隊は入る。宿因の大さく。み慈と玉との明證あり。この一條ハ云々と昨々犬川

莊助が告られ。時外よ立くと。かど如此を安づん。さればをあと。松平ハ廻焼雪代不
と舊名ハ世四郎。雪代大の娘とよ世の鄙語もあらゆ。世四郎も亦大塚生を畜れ
犬と同名。况カ二尺八の四字をよ立ち。又合え。八房の三字と。彼八房へ里見の
愛犬吾黨の天をり。自然と苗字す。セイ。も又身の中ふ慈わる。も皆彼子類り
けん字畫をよろ。一條ハ大塚生の説明あり。昨夕彼人々と送不意中を盡せり。
詳よ示され。すと鑿説よ似れどもカ二郎尺八と名をのよ。立く相識。又四犬士を
延え。と敵を防ぐ。戰死せ。も唯士狹の所為のよ。かくて彼より共も山林房へ
す。似く。八房の犬。宿因ある。すと。かくて。四犬士の窮院不代え。と可惜命を
隕え。死え。と欲せ。猪平が。死ざ。うて。共の恩。芳天の命。ち。陽報。未世に
美談。あ。死。ば。身。単節。も。死。死。く。哀。も。傷。れ。と。七日。々々。の。追薦。供養。
かく。菩提。を。吊。へ。と。か。死。人の。あ。す。ば。れ。れ。と。彼。ホ。二世。の。王。後。乳。母。子。な。れ。ば。

俗よりは乳兄弟ゆく恩義へ敦うるを喪ひて心の憂ひとつづりとぞや。天翁が鳥の両翼をうち落されふふ化う然どそ歎くも甲斐かと所行し世よ雑うる力二郎入八木が親とあう妻とあう幸山と歎詠樂ひうきう虎死と皮をとふ人死と名せて送せ老少壽天を命ぐと悟ふべ誰う死がう死せふ百歳の上壽を保つも余終むる枕方み残る妻子の如み何時ともみかがむあぐ死すをやがゆと懇意よ諭せ言葉の末よ置く露欽栗欽蓮ぐと膝よ落せ感涙小顔を背げて嘆息し恩義よ厚き主命を阿と感くう音音ひさすり思ひどよきうじあ。単節ハ辱さふ四荅うら両袖を各顔よ推當く只潜然と泣す。中少稽平。和う廻不退たく縁頬のあやある障子の不うふを又犯頭を低て黙然う一セ道節うりとくや死れ世四郎にて圓坐よ入らうけ。そくととゞ立れべ。稽平へ稍近づむ。お恭く銃鏡を道節よ返してりや。不肖の某慟よ死

後れやくまゐ見參よ入る。恥りくらひ。况二年來の節を折え音音を訪ひ。一方二郎尺八木が戦歿の事の趣竊ト妻子の報知。而彼四士の往方をもん究ゆんとぞひのを余る。昨夕圖。田文とく。森蔭。君の撞見。大川生を挂ん。そぞり違へる四箇の首級ハ舊縁の過後。かん。おもとぞ送ふ知り。う。等共の首級を其處。主君の携られ。亦是恩義の感應かべ。さればゆ。その夜。大川生の団大士の友垣を結せ。死て悔かたす。共が送忠をもく。遂てゆ。とゆ。頗り。感激の臉子誠を頭せ。道節も亦感歎。て豫て。名を。之。勝。老人の志氣。頗り。直今眼前。行狀を。あれ。ゆく。感。若。や。時。一旦の過失。誰か。あらん。今。あで。ゆく。羞。と。久。舊恩。絶く。忘。と。か。寵。子。を。相助。く。が。為。心。を。盡。せ。と。忠。の。功。莫。大。か。れ。が。今。こ。れ。を。す。む。わ。か。あ。ま。時。一。條。を。贖。か。餘。を。あ。ある。と。父。尊。靈。か。り。代。り。ま。と。勘。當。を。免。ま。り。ま。

あり音音を妻とて力二郎尺八ホガ亡魂を慰わよ彼水もそと本意か。わといれて
稽平額よ汗してこそ多ひけもなむ勘當赦免の一條ハ難くいへども頭小霜を戴く。
浮世小望か死外く况子共を敵よ擊せ。數々の挾轡無常の嵐よ花の萎委を香ひ耗る。
兩個の娘婦を寡ふあら。恥かえりく妻を娶らんや。こそやせど免許を稟さう。昨夕
をひひぞうと。音音を縗小訪ひ。を舊情より引き下さんと思食う故あべ。ひと朽ぎくいと
辭せざく怨れ。音音も羞く額を拭く婚縁のゆき。うちもくづあ疎に。戯言も事かどりん。要かにまどと喰む席や。堪せんとひきを道節急よ
呼をあて。嬸よまのひの腰を言一トび口より坐し。ハ駄も及びく。され豈漫々戯
言と老人老女を辱めんや。一日かくとも稽平とをや。嫁夫婦よせだもあらば忠孝身
を殺する力二郎尺八ホが志ハ画餅とあらん。母のゆき。蓑衣の父とぬれぬ彼水が
あらえ。愁慕。その亡魂の顕れ。も尺このよふよろそ。かれがその子を母のゆき。父あたゆの
如くをうとけ。やうり父あり母あり。との孝心を果すと利害ハ云々と分明に彼
樂を満ちせる。のを皆講じりべし。や。これを推辞。子共の為不慈かたみといれ。便
是力二郎尺八ホが忠孝を賞ほる。第一議枉く。母意が強く。又稽平が音意
と。訪ひ。素う情義の為や。取平が證あらのを。これひづかと疑ふ。死件の證
ひ。をひ。そと懷。う。二通の書状をどうぞ。うち折き。それを音音よ示してゆ。う。
あれ。昨夕大塚生。よ。下りて對面せし。夜は。被村雨の大刀を返して送る意中を説
盡して。且稽平がタを向ひ。ふ。大塚生。云云と巨細よ告ぐ。音音へ與る。の書状を
示され。う。そと懷へ。ふ。あらねども。やくその意をゆま。ま。音音よ代りく。件の
金。う。う。封皮を折た。そとけ。ふ。力二郎尺八が母の安否を問う。状へ。又四犬士を紹介を
別紙よ追書。あれども。その。の迹を。や。う。ねば。うち。稽平が筆を。ぞ。さ。ざ。の
紹介。や。力二郎。ホが名を。のを。あ。と。稽平。が。名を。署。ま。う。へ。嫌疑。小憤。の老人。比

感、渋少嘆びふければ安ら单節ハ酌やもぬ堪に頭を低くうわ泣くゆり音章頗り
目を拭ゆくア道節がう人をも四犬士小憑ミテをう給とひ恰とひ人情節義
膽小銘ト骨よ徹も哀歎苦樂ヨ道節ハ稽平ヒ賑潤ム目を指シテあぐ嘆息
あうけるかてあえだる仰ぎれ、四犬士ハ婚禮の式ヲ挾リ提撕く稽平音音ヨ形
ぢりかつ合巻執綿して千秋樂とぞ祝しける縛既ゆく果一々道節ヲ飲びて
更ふ又盃を四犬士小勸る程不曳も单節ハ庖滌小退りく飯を炊き膳立て送
かく酒食を薦れば音音ヘ地焼の邊よつゝゆく酒を温め茶を煮しろ嘗待大
きかくがうけどそが程小道節ハ四犬士小告もす世ふ情人の夫婦とかりくる今も
昔も羨れども稽平音音が如丸ハ稀へ就て又晤譚ありカ二郎尺八ハ青年某と
蒙。

同ドヤリトシトモゆく妻を娶りレハ父の指揮はあれどそハ音音が老実よ某を
字育る元稽平が先非を悔く漁者とゆすまふ敢又他家より仕へモ亦別妻を

娶がりて、父道策はまく竊み隣より稽平音音を今まに許して
夫婦せんとす。而が子のすゑを妻を娶らせて親を慰め
ちあぐ。余る家力二郎尺八を婚姻の次の日より母よ別れ妻ふ別れと再會の時
一もかく忠義の為ふ身を殺せども孝感の致を所歎その二親を全して婚禮の
送念を果す。こゝ頗奇かびや。とく衆皆感嘆して道策が惻隱の大
きくやぬを稱け且して信乃がいゆく現成敗へ必とも前知あらずあり。
譬へば燒雪父子の存亡吾黨の危難の如くさればいぬ日稽平叟よ一封た
書を委られ某よ先あくて大川生へあつてあるわづの婦よ對面して犬山城の
御道す。某ふ引見。加碑彼書大川山生が開封して後よそのぬふを
うち縛粗語ふ似れどもその叙を失ひ是則機变え機变の前知あらずか
立が彼根五平ふを漏らし擊苗これとあふをんへ充々危一もかくじよ。

まや。まうまう まひさ き。のをまき まくすまもまと。ひぬやま
其せば莊助も亦膝を進め、彼定正へ大歎。縦今撃は果ひと、大山の、馬を走
こまくまくら。そぞりあらうもう。あくちぎ。き。うる。まきまくちまくまく。
越後龜門ホをまう。敵兵縣封捕吏が、も後讐の義よ稱す。又定正を討んと
まうが八犬士具足の日下里見殿を相佐け。その隨から軍をもぐ。今ひこの時
どくの現八戻ふ同意と。兩兄寔ふ説ゆて。カニ郎兄弟の首級を羈よ葬りて
あが女流を落玉べ。とつむく傷をうえれば、小文吾も亦頷む。そも究竟の處あり。
燒雪夫婦と兩婿婦は、まれ行徳へゆく道にて父文五兵衛と妙真よ憑そむく
後安けん疾。その準備をあわう。と四人齊一勧む。道節この議よ役ゆ。駆く
稽平音音ホ。辯のこうをぬき。と、行赤を相譚。ホカニ尺ハが首級のゆ。今
この敵地より埋葬ん。へ狀りぬ。と、されば大田めを煩えん。と行徳へ遣て。彼地ふ
葬ふと。とようされ。幸申て馬もあれば衣裳調度を附負。と曳すと單節と送代。
幸もせよ。乗もせよ脱落かせと急せば。音音行李の準備して。昼餉の料の握

飯を人別ふ累む程ふ曳ひ单節ハ馬萩屋ある馬よ屢穿林を飼ゆる縁頬
近く牽すよりを檐の柱よ繫駐くひとく音音稽平ホグモトテふ並び跪起て
豫てひ多ひ次モト自殺のタクニテの様やせゆふよう。あらふ任せ候ねども切く
せあり厄とありく良人の菩提を吊す。ころすのとハ許きをあへといふ訖レビ准
備の刃物をもみく取く發願得度の頭髪を弗と剪放ちカ二郎尺八ug首ふ
添て二袂ふ推包ミ引綿びど鞍の前輪よ附るふかん稽平音音ハ感嘆と禁と
す。どうやらごけんよとおもせづぎ。ふがん。おもせづぎ。ふがん。おもせづぎ。
あふ竟よ及び道筋ホの五天士も貞操節義を嘆賞してひどい不便よひる當下
をもひひくとも。ふつま。音音ハ曳ひホグモト附る馬をつづくとえり頗りふ嘆息して彼馬のタケノ和子ヤモ
豫て鞍挂り犯賓客達笑更彼古主の乗替ゆく年來秘藏の逸物あれば去年
煉馬の没落ふ歎よ取せんとのキムと兩個の媳婦を合鞍ふ衆しく重團を脱き
矣。さとばこの地不落苗りそもそもこれぞ古主の像見とえべ貪れ家畜立く豫て

大傳玉車卷之二



八大傳玉軒卷之二

編述 曲亭馬琴稿本

淨書

田中

正造

画工

柳溪

川齋

重英

信泉

出像

削刪

中村

喜作

校訂

神田菴

驥徳

家傳神女湯

薦

ゆドん諸病すすり第一産前産後ちのまちみゆく又うちみふす
けせよのひのありせんをまふの功あり又二日えひをまつて
徳どくを

精製奇應丸

葉あらそえうるい筋の加げんをあり制本方たてあらすまうと世上の類
あとかきうるい奇功めゑ神の如くつまう用ひあらへんかづく知らん
大包三百粒餘入代え朱中包三十六粒入代え平下小包十粒入代五分

婦人之虫の妙藥

つむ却なきく産後を抱きうぬる用ひて即効あり一包代六十四文
半包代三十二文
くまのいの正ちあるをえうるいだんむく多くつをあへむ製方旅秘
かがんをりくこのかほとの功をえ一色代五分

熊膽黒丸子

江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店の向

製藥并弘所

江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店の向

瀧澤氏



里見八犬傳第六輯全五冊

當未士月登滯うを出でてやう

全初輯ヨリ第五輯迄廿五冊

先年よりこの節を追々賣出し置け

朝夷巡嶋記第五編全四冊

第六編全六冊當未士月うを出で

越後雪譜 江戸著作堂主人著

北越鈴木牧之考訂 近刻

秘笈名方

神田瀧澤興継宗伯甫纂輯 多く経験の良方をあらむ 近刻

文政六癸未年

大坂書林

河内屋太助

篤硯壽利市三倍

江戸書林

若林清兵衛

春正月發販

山崎平八

筋違御門外神田平永町

筋違御門外神田平永町

馬喰町三町目

本所松坂町二町目

心齋橋筋唐物町南へ入

平林庄五郎

筋違御門外神田平永町

筋違御門外神田平永町

筋違御門外神田平永町

